

パプアニューギニアにおけるドイツ語⁽¹⁾

クレイグ・アラン・フォルカー

■はじめに

日本とオーストラリアの間に位置するパプアニューギニアは、メラネシア最大の国家であり、地球上で言語上最も多様な地域である。世界中でパプアニューギニアほど多くの言語が使われている国はなく、人口五四二万二八〇人の同国に世界中の六九一二の異なった現存の言語の存在が突きとめられている(Gordon 2005)。同国は一九七五年に独立し、今日ではイギリス連邦に属する議会民主主義国である。同国の住民は、民族的にも言語的にも、また文化や生活レベルの面でも、きわめて多様である。独立以前、パプアニューギニアは植民侵略者の言語使用を余儀なくされたことが数度ある。ドイツ語、英語、日本語がそれにあたる。最初の侵略者はドイツ人で、この国北部を一八八四年から一九一四年まで植民地とした。この間、ドイツ語はドイツ領ニューギニアにおける公用語とされた。しかしドイツ語が公用語となつても、現地人の多くはそれを使用しなかつた。独立後の現代パプアニューギニアにおいては、ドイツ語の影響がみられるのは、土地の名称や沿岸地域諸言語における借用語に限られている。

■ドイツの植民地時代

メラネシアに対するドイツの「影響」(もしくは「干渉」という人もあるだろう)は、ハンブルクのヨハン・セーザー・ゴドフロイ(Johann Cesar Godeffroy)父子商会をはじめ、貿易商人や入植者

が、コプラ（ココナツのこと）のプランテーションをビスマルク諸島に開設した一八六〇年代にさかのぼる（Dotlan 2005）。いわゆる「ドイツ領ニューギニア」（カイゼル・ヴィルヘルムラントとビスマルク諸島）におけるドイツの事実上の植民統治は、一八八四年一月三日、二四万九五〇〇キロ平方に及ぶ北部メラネシアをドイツ領とする旨の宣言によつて始まった。その翌年には、ドイツの主権はミクロネシアの大部分にまで及んだ（Anton n.d.）。こうして、ドイツ領東アフリカを除けば、第一次世界大戦前のドイツ帝国最大の植民地が成立した。帝国主義の時代の常として、ドイツの主権宣言は、主権をもつ先住諸民族の同意を得ずして、さらには彼らにはそのことを知らしめもせずして、彼らからすれば外国語たるドイツ語でなされたものであった。

当初、ドイツは植民地管理を民間の「ニューギニア商会」に委ねておらず、植民地政府が実際に成立了のは一八九九年であった（Schnee 1920: 578）。植民地帝国をつくろうとするドイツの試みは短命に終わり、第一次世界大戦の開戦とともにオーストラリアと日本が侵攻してドイツ領ニューギニアを分割して占領、（オーストラリアが管理する）国際連盟のニューギニア委任統治領と（日本が管理する）ミクロネシアとなつた。

ドイツによる植民地支配は比較的短いものではあつたが、その影響は現代のパプアニューギニアにおいてもいまだ感じられる。北部沿岸地域や島嶼部の州においてはドイツの植民地時代に譲渡された土地をめぐる争議がいまだに顕在化することがあるし、イーストニューブリテン州やニューアイルランド州の小売業界の大半は、ドイツ時代に労働者として連れてこられた中国系の子孫たちが掌握している。さらに、ニューアイルランド州の「ブロミンスキ－ハイウェイ」は敷設者であつたドイツ人総督の名を残しており、今も国内のハイウェイで最も整備されたもののひとつである。国内の混成

共通語としてのトク・ピシン語の広がりもまた、ドイツ時代にルーツを持つ。ところがドイツ語 자체は、いくつかの地名のほか、トク・ピシン語や現地語諸語に入っている比較的少数の借用語にその名残がみられるだけである。

■植民統治と教育におけるドイツ語

ドイツ人はニューギニアに入植するとともに、地域の共通語がすでに存在することを知った。その後トク・ピシン語となるピジン英語である。Keesing (1988) が明らかにしたとおり、この言葉の起源は、さまざまな言語的背景をもつポリネシアの乗組員が出会う、中央太平洋の航海船にあった。多くは「プラックバーダー」と呼ばれる黒人奴隸誘拐者に強制されたりだまされたりして、メラネシア人がフィジーやクイーンズランド（オーストラリア）やドイツ領サモアのプランテーション労働者になるとともに、ピジン語は彼ら労働者間の、また彼らとヨーロッパ人雇用主や中国系の貿易商人ら、よそ者たちとの間の、共通語となつた。この労働者らが故国にピジン語をもち帰り、それを周囲に伝えていたのである。

こうした共通語がすでにあつたため、プランテーションの所有者や商人たちは、幅広いコミュニケーションのためにドイツ語を普及させる必要を特に感じなかつた。むろん、そう多くはなかつたドイツ人植民統治者たちはドイツ語を話していたし、政治文書はすべてドイツ語であつた。だが、地元住民と「マスター」と呼ばれる植民者の間には言語の壁がある方がよいと考える人々もいた。それどころか、少數のヨーロッパ人支配者が「秘匿言語」を保持できるように、地元住民にはドイツ語への

アクセスを全面的に禁じるべきだと考える人々すらいた (Mühlhäusler 1984: 35)。

政府の立場はそこまで極端ではなかつたが、ドイツ語による教育導入の試みには及び腰だつた。反面、ヨーロッパ「文明」の促進と最低でも初等教育の提供を、政府は植民地統治者の義務として掲げていた (Schnee 1920: 308)。ドイツ本国では、すべての植民地にドイツ語を普及させるといふ国家主義的構想が広がつていて、たとえば一八九七年には「ドイツ植民地協会」(German Colonial Society) が、ドイツ語学習促進のための公的カリキュラムに従事する布教団体への資金提供を求めて、政府にロビー活動をしている (Schnee 1920: 308)。Mühlhäusler (1984: 34)によると、第一次世界大戦開戦時、植民地政府はトルピシン語をドイツ語に代えるべく、ドイツ語による教育を大幅に拡大するための法制化にとりかかっていた。しかし、これが現実に法律となるとはなかつた。

ドイツ領パプアニューギニアにおける教育に関して、圧倒的に大きな働きをしたのは、カトリック布教団体であつた。『ドイツ植民地辞典』(Deutsches Kolonial-Lexikon) は、同地の公立学校を一校しか挙げていない。ニューブリテン島東部のラバウル (当時のハンナソンハーフェン) の学校と、当時はドイツ領ニューギニアの一部であつたサイパンの学校である。政府の教育への関与がこうしてごく限られたものであつたのとは対照的に、同書はプロテスタン系五六校、カトリック系一八九校といづれも初等教育学校や職業訓練校のレベルの多数の私立学校を挙げている。これらの学校での授業はドイツ語で行なわれることもあつたが、一般的には地元の言語や「教会の共通語」として選ばれた現地語——たとえばカイゼルヴィルヘルムラントのコテ語 (Kôte)、ヤーベン語 (Jabem)、ビスマルク諸島のクアヌア語 (Kuanua) など——が使われた。ノベした学校に通つた結果、一九七〇年代になつてもドイツ語で意思疎通ができる人々がラバウルにはいたが (Volker 1982: 10)、ノの場合のバイリン

ガリズムは、コミニティのレベルではなく、個人レベルにおけるものであった。

ピジンドイツ語と呼べるものがこの植民地で発展した証拠はない。Mühlhäusler (1988: 35-36) は「ピジンドイツ語」として、ドイツ人運営の布教施設で働くニューギニアの人々の話し言葉や書き言葉の事例を挙げているが、データにばらつきがあり過ぎるため、これらのサンプルは異民族間コミニケーションのための体系的な言語の一種ととらえるよりは、第二言語学習者に典型的な、不十分な習得段階のドイツ語とみなすべきであろう。けいじ 繫辭や語尾変化の欠如など、これらのデータに広くみられるピジンの典型的な特徴は、トク ピシン語話者が第一言語を習得するにあたっての転移 (transfer) として説明できる。

■ラバウル クレオール ドイツ語

ピジンドイツ語がいかなるかたちにせよドイツ領ニューギニアの共通語として発展した証拠はないが、同植民地こそは、ドイツ語の語彙を基盤とするクレオール語としては、検証された唯一の事例を生み出した (Mühlhäusler 1988: 36)。ラバウル クレオール ドイツ語、すなわち「われらがドイツ語」 (Unserdeutsch) である。ニュークリテン島東部のラバウルの近く、ヴァナポペ カトリック布教所近辺で発展した「混血」⁽²⁾ のコミニティの言語であった。ラバウル クレオール・ドイツ語は、一八九八年にカトリックの宣教師が、ニュークリテン島 (当時のノイポメルン島) のガゼル半島に位置するドイツ領ニューギニアの首都、ヘルベルトルーエ (今日のココボ) の郊外、ヴァナポペに設立した孤児院で発生した (Volker 1988)。同孤児院は、地元住民 (とくにトライ族) の母とヨーロッパ人やアジア人、

ミクロネシア人の父との間に生まれた子供たちの教育を目的として設立された。当初は捨て子のみを収容していたので、ほとんどが村の長老たちが連れて来た子供たちだった。第一次大戦開戦時のオーストラリアの侵攻と大戦末期におけるドイツ国籍保有者の本国への引き揚げに伴い、児童数は増加した。地元女性と擬似家庭を築いて暮らしていたドイツ人男性の大半が、ヨーロッパに引き揚げる前に子供たちを孤児院に置いていったからである。さらに、オーストラリアがドイツ植民地を掌握すると、初期のオーストラリア政府は本国における「かどわかされた世代」(Stolen Generation)といわれるアボリジニーの子供たちの強制連行を想起させるような政策をとつて、地元民の母とともに村に残った混血の子供たちを強制的に移転させることも多かった。

孤児院に連れてこられた子供たちの中には、まだどの言語も話せない幼い子供もいただろう。だが言葉を話せる者たちの言語は多岐にわたった。大半はトライ族の言葉であるクアヌア語を話したが、地元の他の言語を話す者もいたし、それに代わって／それに加えて、マレー語、かんどう廣東語、タガログ語、トラック諸島の言語、ドイツ語などの移民者の言語をかじっている者もいた。言葉を話せる年齢の子供たちの大半は、トク・ピシン語の初期段階の言語にある程度通じていた。事実上、思春期前の子供たちのコミュニティとしては、この孤児院の寮における子供たちこそがトク・ピシン語を第一言語とする最初のコミュニティであったと思われる。孤児院での授業では、ドイツ語やオランダ語を母語とする教師や教会関係者らが、オーストラリアがドイツに代わって植民した後もドイツ語を使い続けた。英語については、第一次大戦後、授業科目として導入されたが、第二次大戦後に同校が再編されるまで他の授業のための言語として使われることはなかった。このころまでには、幾世代もの子供たちが同校の教育を受けて巣立つており、多くは仲間内で結婚していた。

第二次大戦中の日本軍占領下での激動や破壊の後も、彼らの多くはガゼル半島にそのまま残り、ニューブリテン島のコミュニティは再編された。戦後も人種による分断が厳格であつたため、彼らの多くは同じコミュニティの相手と結婚した。混血である以上、彼らがオーストラリアの白人社会に統合されたり、オーストラリア本国へ移民したりすることは不可能だつたし、周囲の地元住民とも交わらないよう奨励されていた。

ヴァナポペ校は英語を第一言語とする施設として再スタートを切るべく、アメリカ人宣教師を採用した。その結果、ヴァナポペの孤児院のコミュニティではドイツ語使用の機会が減り、コミュニティの若い世代は親世代と同じトリリンガルとして育ちつつも、親世代のラバウル クレオール ドイツ語、トク・ピシン語、ドイツ語の三言語ではなく、ドイツ語に代わつて英語であつた。それでもヴァナポペの混血のコミュニティは、ドイツ人としてのアイデンティティを強く保持し、自らを「茶色のドイツ人」、まだ見ぬドイツを「祖国」(Vaterland)と呼ぶことさえあつた。ドイツの血とはまるで無縁な家族ですら、ドイツのクリスマスキャロルやクリスマスの食べ物を遵守していた(Volker 1982: 12)。

■ クレオールとしての起源

ヴァナポペの孤児院には、開設当初、Hymes (1971) がピジン言語の成立に必要だとする三つの状況が、すべてそろつっていた。すなわち、異なる複数言語間の接触があり、そのなかの一言語（ドイツ語）が有力であること、複数言語間の明確な境界線、それに当時の権威主義的な教育における子供たちとドイツ語話者たる教師との大きな社会的距離、である。とはいえ、生徒たちはすでにひとつピジン語、

すなわちトク・ピシン語を共有していたのであり、だから新たな言語がなぜ発達したのかはわからない。

むろん、世界中の若者世代に共通の現象として、旧世代をしばしば意図的に憤慨させるべく、新しい話し方を開発することがある。現代のオランダにおけるチルタール (Chilltaal) ストリート言語にみられるように、それには言語の混交 (language mixing) という方法が用いられる」とが多い (Appel and Schoonen 2005)。少なくとも、今ひとつの事例たるパプアニューギニアにおいては、その結果、若者世代の使用言語は、語彙を他の言語の語彙に置き換えたピジン語となつた (Volker 1989b)。ヴァナポペの混血のコミュニティの場合はやむに人種的アイデンティティの確立というニーズがあつたが、その徴しきとされるのがメラネシアにおいては多くの場合言語であつた。厳格な人種間の壁のため、混血の彼らはガゼル半島の他の民族コミュニティに同化することはできなかつた。ある高齢のラバウル クレオール ドイツ語話者が言うように、「我々はドイツ人でもカナカ人でもない。我々には我々自身の独自の言語が必要であった」のである。

若者世代にはほぼ普遍的な自分たち独自の言葉を発明する能力に加えて、こうした感情にかんがみれば、ラバウル クレオール ドイツ語は「隠語」、すなわち部外者の排斥を目的とするひとつの言語とみなすのが最も妥当であろう。Laycock (1989) がピトケルン島の言語 (Pitcairnese) について記述しているのとまさに同じく、ラバウル クレオール ドイツ語をつくった人々は、ドイツ語を使うことはいつでもできるにもかかわらず、複数の文化を受け継ぐ歴史上独自の存在であるという意識をもつがゆえに、ヨーロッパ人話者たちから成るドイツ語の主流コミュニティとは別個の人種的アイデンティティを表現したいと願つたのである。

■ラバウル クレオール ドイツ語はどう 「クレオール」か

「ラバウル クレオール ドイツ語の統語法や形態については、筆者によるかなり詳細な描写がある (Volker (1982 and 1989a))。それによれば、ラバウル クレオール ドイツ語には世界中のクレオール言語に共通する多くの特徴がみられる。さらに、それらの特徴は標準ドイツ語の特徴とは大きく異なるため、バイリンガルのドイツ人定住者や子孫が話す移住者の方言の一種とは別個の現象と考えなくてはならない。下記の *れいわせま* 例で最も目立つのは、ドイツ語にみられる主語 = 動詞の形態一致と格変化の完全な欠如である。

ゲルマン諸語とは違って、ピジン語やクレオール語には動詞の連続による構文が多い。ラバウル・クレオール ドイツ語における動詞の連続は、トク・ピシン語におけるものと大変よく似ている。⁽³⁾

(1)

RCG	Du	holen	Eimer	komm.
		fetch	Bucket	come
TP	Yu	kisim	baket	i kam
	you: SG	fetch	bucket PM	come

'Fetch the bucket.'

また、ラバウル クレオール ドイツ語では、トク ムハハ語と同じく、所有格を作るのにたいていは前置詞を使う。

(2)

RCG	Haus	f	Tom
	house	for	Tom
TP	haus	bilong	Tom
	house	of	Tom
	'Tom's house'		

多くのラバウル語やクレオール語と同様に、'for' (f, ヌマシ語の für 由来) が補文標識として用いられる。

(3)

I	bin	am	denken	f	kaufen ein	Ferd.
I	am	PPT	think	for	buy	a horse
	'I'm thinking of buying a horse.'					

ラバウル クレオール ドイツ語はまた、本来は必ずしもクレオール語法と云うわけではないが、

トク ピシン語とアウストロネシア諸語にはみられて、ドイツ語には存在しない特徴をいくつか備えている。それらのうち最も重要なのは、聞き手を包括する一人称複数代名詞と除外するそれとが区別される」とある（トク ピシン語ではそれぞれ *yumi* と *mipela*、ラバウル クレオール ドイツ語ではそれぞれ *uns* と *wir*）。

また、トク ピシン語やほとんどのアウストロネシア諸語のように、ラバウル クレオール ドイツ語は疑問詞を文末に置く。一方、ドイツ語ではそれは通常文頭に置かれる。

(4)

Du	Laufen	geht	wo
you: SG	Run	go	where
‘Where are you running to?’			

ドイツ語が単数形と複数形を区別するために形態上の接辞添加や単語内の変形を用いるのに対し、ラバウル クレオール ドイツ語は複数形のマーカーとして、トク ピシン語の場合の複数形マーク *l*、*ol*（英語の *all* に由来）と同根の、*alle*（ドイツ語の ‘all’ にあたる）を使う。

(5)

De	Chicken	war	gestohlen	bei	alle	Rascal.
the	chicken	was	stolen	by	PL	criminal

'The chicken was stolen by the criminals.'

ピジン語やクレオール語では受動態はめったに使われないものの、前述の例が示すとおり、その構文は英語の構文に倣つたもので、be 動詞の直後に過去分詞を置き、それに by に意味上の主語を続ける。ドイツ語においては warden ('become') と前置詞 von ('of') に続いて意味上の主語を置き、文末に過去文詞を置くが、それとは異なる。英語がモデルになっていると思われる構文の今ひとつとの例として、be 動詞と現在分詞を使って組み立てる進行形がある（上記の例③）。

ドイツ語の名残は、ピジン語やクレオール語ではまれな語形変化する繋辞と、Deutschum（「ドイツ氣質」）や Hochzeit（「ハネムーン」、文字どおりには hoch = 'high' + Zeit = 'time' 最高の時）のような多音節の内容語の形態によくみられる。こうしたドイツ語の名残と、非クレオール的な英語の構文の明らかな借用は、ピトケルン島の言語と同様、ラバウル クレオール ドイツ語が隠語であるという上述の見解を証している。すなわちそれは、ドイツ人でもある人々が人種的アイデンティティを確保するために精緻に構築した言語の一変形なのである。よって、過酷な奴隸状態やプランテーションでの年季奉公から発生したクレオール諸語を検証した Bickerton (1981) の論文にみられるような、クレオール諸語の典型的な特徴の多くは、几乎没有。

■ラバウル クレオール ドイツ語の衰退と消滅の理由

ラバウル クレオール ドイツ語の話者数は、決して多くはなかつた。一九二三年、ドイツ支配の

末期においては、ドイツ領ニューギニアの入植地全域で、混血の人々の総数は二八一人にすぎなかつた (Schnee 1920: 315)。その後のオーストラリア支配下の厳格な人種隔離政策は、その小さなコミュニティの結束を強め、コミュニティ内部での結婚を促進させた。

しかし、独立が近づくにつれて、コミュニティの団結は弱まつた。白豪主義が撤廃され、国籍のなかつたニューギニアの混血の人々にオーストラリアの市民権が付与されるに至つて、人々はパプアニューギニアの首都ポートモレスビーやオーストラリア本国に移住できるようになつた。同時に、人種間の障壁が低くなり、ヨーロッパ系のオーストラリア人とも先住のパプアニューギニア人とも、コミニティの垣根を越えて結婚するケースが増えた。一九七五年のパプアニューギニア独立にあたつては、混血のコミニティの大半がパプアニューギニアではなく、オーストラリアの市民権取得を選択し、数年のうちにほぼ全員がオーストラリアに移住した。二〇世紀末には混血のコミニティのうちでガゼル半島に残つていたのは数十人程度にすぎず、そのうちラバウル クレオール ドイツ語を話すことができたのはほんの数人の高齢者だけであつた。家族意識やガゼル半島へのノスタルジアは残つているものの、ラバウル クレオール ドイツ語自体は、現在では日々のコミュニケーションに使われることはない。二一世紀の最初の四半世紀のうちに、それは完全に死語になると思われる。

■パプアニューギニア諸語にみられるドイツ語語彙の影響

ラバウル クレオール ドイツ語と同様に、ドイツ語自体はパプアニューギニアからほぼ完全に姿を消したが、ドイツによる植民地支配の言語面での名残は、多くの有名な地名やパプアニューギニア

諸語におけるドイツ語起源の借用語にみることができる。

1 地名

パプアニューギニアで最も高い山がヴィルヘルム山と呼ばれるなど、ドイツによる支配の言語的遺産で今に残る重要なものは地名である。ヨーロッパの帝国主義者に共通してみられるように、ドイツの入植者は入植地や地形や島に自らの名を冠した。地元民による従来の呼称があつたにもかかわらず、新たに命名されたケースが多くたが、大きな山脈や島などの場合は、地域の地元住民が行かなかつたためにもともと名前がついていなかつたものもある。これらの多くは第一次大戦後、オーストラリアの占領とともに改名されたが、その後独立した現代パプアニューギニアでもいまだ使われている例もある。これらのドイツ語の主な地名は、論末の Appendix 1 で示した。

2 ドイツ語起源の借用語

ドイツ語の借用語は、現地語諸語にもみられるし、植民地時代のドイツ領ニューギニアや現代のパプアニューギニアの主要な共通語であるトク・ピシン語にもみることができる。ドイツの支配が強かつたニューギニア本土の北東部沿岸地域（「カイゼルヴィルヘルムラント」）とビスマルク諸島の現地語諸語においては、ドイツ人が持ち込んだものにはたいていの場合ドイツ語の名称が採り入れられた。たとえば、ニューアイルランド島のナリク語でパイナップルの意味の *nanas* (ドイツ語の *Ananas*) などの植物名、ブーゲンヴィル島諸語で金属製のナイフを意味する *mesa* (ドイツ語の *Messer*) のような新たに持ち込まれたテクノロジーの名称、この地域の多くの言語において悪魔を意味する *Satan* (ド

イツ語の Satan) のような宗教用語がそうである。多くの場合、単語の借用はトク・ピシン語を介してなされたり、あるいはトク・ピシン語に導入されたことでその定着が促進された。おそらく今日の大半の話者は、これらの語の起源がドイツ語にあることを意識していないと思われる。

トク・ピシン語は英語を基盤とする南太平洋のピジン英語に由来するが、ドイツの植民地時代にニーギニア北部とビスマルク諸島の主要な共通語として定着したのであつたから、当然ながらその多くの単語がドイツ語起源となっている。たとえば、現代でも頻繁に使われる明らかな例としては、「外にする」の意味の rausim (ドイツ語の raus = 'outside' から)、「的をはずす」の意味の popai (a) (ドイツ語の vorbei = 'past' から)、「ガムタイヤ」の意味の gumi (ドイツ語の Gumi = 英語の 'rubber' から) などがある。さらに、ローマカトリック教会で使われたラテン語に由来する語にも、ドイツ語と同根のものがいくつがある。たとえば pater (ドイツ語でもトク・ピシン語でも「聖職者、司祭」の意) などがそうである。ただし、英語とドイツ語の語源が同一の、または近接の場合も多いため、haus (ドイツ語の Haus、英語の house) や Katolik (ドイツ語の Katholik、英語の Catholic)などの場合、英語とドイツ語のいずれが語源か、判断がつけられない。実際のところ、トク・ピシン語の形成初期段階においておそらく両言語にその語を聞き取って、導入がいつそう促進されたといった場合がほとんどであろう。英語に触れる機会が増やしむに、パプアニューギニアに長期居住するドイツ語話者がめつきり減つたせいで、トク・ピシン語のうちドイツ語に由来する単語の大半は、英語に由来する語に置き換えられていったし、現在でもその傾向は続いている。これは特に技術的な用語にあてはまる。たとえば、大工仕事の用語はかつてほとんどがドイツ語に由来するものであったが、今日では、「板」を意味する hobel (ドイツ語の Hobel)、[^{のん}] を意味する maisel (ドイツ語の Meissel)、「おがくず」を意味する

味する *sigmel* (ドイツ語の *Sägemehl* から) は、英語に由来するものに代わって、それぞれ *plen* (英語の *plane* 「^{かんな}鉋」)、*sisal* (英語の *chisel* 「^{たがね}彫刻刀」)、*pipia bilong so* (英語の *rubbish of the saw* 「のいがりの屑」) となつた (そのほか英語とドイツ語の両方に由来する語が同時的に使われていた時代の事例は、^{スルム} Mihalic 1971 を参照)。沿岸地域の多くの地方では、たとえば「祈る、祈り」が *beten* (ドイツ語の *beten*)、「ペイナップル」が *ananas* (ドイツ語の *Ananas*) など、ドイツ語に由来する語が主に高齢者によって使われている一方、若い世代は英語に由来する同義語の方を好んでいる (上記の例では *pray, prayer* から *prea*、また *pineapple* から *painap*)。ドイツ支配下に置かれることのなかつたハイランズ地方では、トク・ムシハ語話者の大半が以上のよつたなドイツ語起源の単語の多くをまったく使わない。トク・ムシハ語の語彙やドイツ語起源の単語は、これまで七パーセントと見積もられてきている (e.g., Muhlhausler 1986: 192)。しかし近年ではドイツ語起源の多くの単語が使われなくなつてきているため、この数字はもはや大きすぎるだろう。オンライン辞書 Mihalic Tok Pisin Dictionary (Burton and Gesch n.d.) を例にとると、1100五年七月時点の収録語のうち、明確にドイツ語に由来するものは11パーセントにすぎず、残る五パーセントはドイツ語、英語の両方に由来すると思われる。しかし、ドイツ語起源の単語で今も残るものは、頻繁に使用される語 (たとえば「外出する」の意味の *rausim*) であることは強調しておかなければならない。

■現代パプアニューギニアにおけるドイツ語

驚くほど多数のドイツ語の地名 (Appendix 1 参照) は例外として、ドイツの支配とその植民地政策

は、今日のパプアニューギニアにおけるドイツ語をめぐる状況に、その影を落としてはいない。パプアニューギニア人が通う学校ではドイツ語が教えられることはまったくないし、パプアニューギニア政府の外交機関でさえ外交官にドイツ語教育を行なう必要性は認識していない。

第二次大戦後、ドイツ語を使って教育を行なう学校は二校あった。ともに主として中央ヨーロッパからの宣教師の子供たちが通う学校であつた。オーストラリアの植民地支配下の時代と一九七五年のパプアニューギニアの独立後しばらくは、ドイツのルター派とカトリックの宣教師や布教従事者らが、教育をはじめとするそれぞれの教会の活動において重要な役割を担い続けた。第二次大戦後は、ドイツ語による小学校のカトリック校 (Kathrine Lehman Schule) が、かつての金鉱山の中心地、モロベ州の山間地（ラエから内陸に入った地域）のワウで、ルター派教会によって運営されていた。同様に、五年生から九年生までを対象とするドイツ語で教育をする学校が、一九五四年、イースタンハイランズのゴロカ近辺に開校した。ハイランズとセピク地域で布教を始めたイスラム福音派兄弟教会 (Swiss Evangelical Brotherhood Mission) が設立したものであつた。両校ともにドイツ語を話す家族の子弟たちだけを入学させ、その家族はほとんどがこうした教会など宗教組織にかかわっていた。これらの学校がパプアニューギニアの生徒を入学させることはなかつた。

一九七五年にパプアニューギニアが独立すると、政府は布教団体や会社に対して外国人労働者ではなくパプアニューギニア市民を雇用するよう強く求めた。独立後のこうした地元民優遇政策や暴力的な犯罪の急増によつて、ドイツ語を話す家族は急速に減少し、ルター派の学校は一九九〇年代半ばに閉校した。もうひとつの学校は今も存続している。布教に従事する者に子供がいる限り、その団体の学校を設けておくという方針のためである。しかし、二〇〇五年の時点では同校には一〇人の生徒し

かおらず、うちスイスの布教団体関係者の子供は三人のみであった。

どちらのミッショナリースクールもパプアニューギニアの学生を入学させなかつたため、どちらの学校もパプアニューギニア人のドイツ語使用に直接的な影響を及ぼすことはなかつた。国内にある六つの大学でもドイツ語を教えることはなかつたため、独立後のパプアニューギニア人がドイツ語を学ぶことができる公的な場所は、唯一ラエ インターナショナル ハイスクールのみであつた。この学校も外国人世帯数減少の影響を受けている。そのため縮小化を強いられた同校は、二〇〇三年にドイツ語をカリキュラムから省くにいたつた。ドイツ語クラスが閉じられたとき、約二〇人の生徒がドイツ語を学んでいたが、そのうちおよそ半数がパプアニューギニア人であつた。

今後、パプアニューギニア人が学ぶ学校でドイツ語が再び教えられるようになる可能性は低い。それでももちろん、個人的に学びたいという要求がないわけではない。中央ヨーロッパに留学する学生はヨーロッパで正式にドイツ語を学ぶわけだし、国際結婚などといった個人的理由で公に、もしくは私的にドイツ語を学ぶ必要性が生まれることはある。けれども、英語を有力言語とするアジア太平洋地域というパプアニューギニアの地理上の位置づけや、教育のある多くのヨーロッパ人の流暢な英語力を考えると、二一世紀のパプアニューギニア人の多くにとつて、ドイツ語を学ぶ意味はほとんどない。今日のパプアニューギニアでは、ドイツ語は帝国主義のドイツがメラネシアに入植した一八八四年以前の位置に戻つていて、すなわちそれは言語的に孤立した一部の外国人滞在者の言語であつて、もはやパプアニューギニアの言語ではないのである。

注

(1) ハーブリテン島東部のラバウルの近くヴァナポグのマニヨニティでは多くの人々に地元住民やラバウル クレオール ドイツ語について教えていた。特に次の方々は名を記し、感謝した。Veronica Käse, Theo Hartig, Paul Ah Ming, Leonard Ah Ming, Johann Schultz, Elsa Lüdin, Elsa Hörler, Harry Hörler, Edith Wong, Rosemary Buchey, Sister Anna Katrina. これらの友人のうちの多くは、すでに他界している。また、モロベ州におけるドイツ語教育の現状については Marsha Milani が、イーストハイランズ州オロシガのスイス学校の情報については Dora Siegenthaler が協力した。ただし、間違いがあれば、その責は筆者にある。

(2) 混血('mixed-race') は必ずしも差別的用語とされるだろうが、パプアニューギニアでは多民族の血をひく人々を表わす言葉として、やつした人々によつても一般的に使われている。パプアニューギニアではそれは自らのアイデンティティを指す用語であり、否定的要素を含まないため、ハリヤーでも使用した。

(3) ラバウル クレオール ドイツ語は完全な話しだけではなく、書類として使用されることはなかつた。その音韻はドイツ語とわずかに違うだけなので、ハリヤーではドイツ語のつづりを修正して用いた。言語学上の事例については、次のような略語を用いた。

PL = plural

PM = predicate marker

PPT = present participle marker

RCG = Rabaul Creole German

SG = singular

TP = Tok Pisin

Appendix 1

パプアニューギニアにおけるドイツ語

地名	現地の名	変化の有無
Adelbertgebirge	Adelbert Range (Madang Province)	No
Alexishafen	Alexishafen (Madang Province)	No
Berlinhafen	Aitape (East Sepik Province)	Yes
Binnenhafen	Binnen Harbour (Madang Town)	No
Bismarckarchipel	Bismarck Archipelago	No
Bismarckgebirge	Bismarck Range (Eastern Highlands, Simbu, Madang Provinces)	No
Dallmannhafen	Vanimo (Sandaun Province)	Yes
Finschhafen	Finschhafen (Morobe Province)	No
Finschküste	Rai Coast (Madang & Morobe Provinces)	Yes
Französische Inseln	Vitu Islands	Yes
Friedrich Wilhelmshafen	Madang	Yes
Hansemanküste	Sepik coast, northern coast	Yes
Hagenberg, Hagengebirge	Mt. Hagen	No
Hatzfeldhafen	Hatzfeldhafen (Madang Province)	No
Herbertshöhe	Kokopo (East New Britain)	Yes
Kaiserin-Augustafluss	Sepik River	Yes
Kaiser-Wilhelmsland	NE New Guinea mainland	Yes

Konstantinhafen	Erimba (Madang Province)	Yes
Neuhannover	New Hanover (also Lavongai) (New Ireland Province)	No
Neulauenburg, Neu-Lauenburg	Duke of York Islands (East New Britain Province)	Yes
Neumecklenburg, Neu-Mecklenburg.	New Ireland	Yes
Neupommern, Neu-Pommern	New Britain	Yes
Ottildenfluss	Ramu River	Yes
Potsdamhafen	Gabun (?), (Madang Province, east of the mouth of the Ramu River)	Yes
Preußen-Reede	Lae	Yes
Sattelberg	Sattelberg (mountain in Morobe Province)	No
Schleinitzgebirge	Schleinitz Range (New Ireland)	No
Schouten-Inseln	Schouten Islands (East Sepik Province)	No
Schradergebirge	Schrader Range (Madang Province)	No
Seeadlerhafen	Lorenau (Manus Province)	Yes
Simpsonhafen	Rabaul, Blanche Harbour	Yes
St. Matthias-Inseln	St. Matthias Islands (New Ireland Province)	No
Stephansort	Bogadjim (Madang Province)	Yes
Stoschberg	Suilk? (New Ireland Province)	Yes
Varzinberg	Vunakokor (East New Britain)	Yes
Weberhafen	Nonga (East New Britain)	Yes

パプアニューギニアにおけるドイツ語

Wilhelmsberg	Mt. Wilhelm (tallest mountain in PNG)	No
Willaumezhalbinsel	Willaumez Peninsula (West New Britain)	No

ノーベル半島 : Dotlan (2005), Moran (2004), and Schnee (1920)

* 異國語の翻訳やアルゴン語、換語の表記

Archipel = archipelago	Hafen = harbour	Küste = coast
Berg = mountain	Halbinsel = peninsula	Neu = new
Binnen = inner	Inseln = islands	Ort = place
Fluss = river	Kaiser = emperor	Preußen = Prussia
Französische = French	Kaiserin = empress	Reede = road
Gebirge = mountain range		

参考文献

- Anfinger, P. Albert (1947) Die Geheimsprachen auf den kleinen Inseln bei Madang in Neuguinea. *Anthropos* 37-40: 629-696.
- Appel, René and Rob Schoonen. (2005) Street Language: a Multilingual Youth Register in the Netherlands. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* Vol. 26, No. 2: 85-117.
- Anton, Ralph (n.d.). *Deutsche Schutzgebiete - Die Kolonien des Deutschen Reiches*. <http://www.deutsche-schutzgebiete.de/neuguinea.htm>
- Bickerton, Derek (1981) *Roots of language*. Ann Arbor: Karoma.
- Burton, John and Pat Gesch (n.d.) *Revising the Mihalic Project*. <http://coombs.anu.edu.au/SpecialProj/PNG/MIHALIC/>

- Dotlan, Griffon (2005) *Frontline18: Die deutschen Kolonien - Neuguinea und die Inseln des Stillen Ozeans*. <http://www.frontline18.com/history/326/>
- Gordon, Raymond G., Jr. (ed.), 2005. *Ethnologue: Languages of the World, Fifteenth edition. Online version*. <http://www.ethnologue.com/>
- Hymes, D. (1971) *Pidginization and Creolization of Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keesing, Roger M. (1988) *Melanesian Pidgin and the Oceanic substrate*. Stanford: Stanford University Press.
- Laycock, Donald C. (1977) Special languages in parts of the New Guinea area. In: Stephen Wurm (ed.) *New Guinea Area languages and language study vol. III*, 133-155. Canberra: Australian National University Pacific Linguistics Series C-40.
- Laycock, Donald C. (1989) The status of Pitcairn-Norfolk: creole, dialect or cant? In Ulrich Ammon (ed.) *Status and function of languages and language varieties*, 608-629. Berlin: de Gruyter.
- Mihalic, Frank (1971) *The Jacaranda dictionary and grammar of Melanesian Pidgin*. Milton, Queensland: Jacaranda Press.
- Moran, Michael (2003) *Beyond the coral sea*. London: HarperCollins.
- Mühlhäuser, Peter. (1984). Tracing the roots of Pidgin German, *Language and Communication*, Vol. 4, No 1: 27-57.
- Mühlhäuser, Peter (1986) *Pidgin & creole linguistics*. Language in Society 11. Oxford: Basil Blackwell.
- Schnee, Heinrich (ed.) (1920) *Deutsches Kolonial-Lexikon*. Leipzig: Quelle und Meyer. (Digitalised by the Stadt- und Universitätsbibliothek Frankfurt a. Main at <http://www.ub.bildarchiv-dkg.uni-frankfurt.de/dfg-projekt/bildprojekt/Lexikon/Impressum.htm>)
- Volker, Craig Alan (1982) An Introduction to Rabaul Creole German. M.Lit.St. thesis, University of Queensland.

- Volker, Craig (1989a) Rabaul Creole German syntax, *University of Hawai'i Working Papers in Linguistics*, Vol. 21, no. 1, January - June 1989.
- Volker, Craig (1989b) The relationship between traditional secret languages and two school-based pidgin languages in Papua New Guinea, *Horizons: Journal of Asia-Pacific Issues (East-West Center)*, Vol. 3: 19-24.
- Volker, Craig (1991) The birth and decline of Rabaul Creole German, *Language and Linguistics in Melanesia*, Vol. 22: 143-156.